



南葵音楽文庫ミニレクチャー

瀧廉太郎と東くめ ～遠藤宏の研究資料から～

林 淑 姫

南葵音楽文庫

和歌山県立図書館内

和歌山市西高松 1-7-38

tel.073-436-9500

2019年10月11日(金) 18:15

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)

「荒城の月」の作曲家瀧廉太郎が歿して、はや五十年にもなろうとしている。本年生きているとすれば数へ歳七十三歳の老人であるが、われわれには何んとなく、二十五歳で夭折した天才として偲ばれてならない。(略)彼の短い生涯が、物語りや小説になってしまはぬうちに、正しい伝記を書き残して置きたいと思い、既に昭和二十三年十一月発行の音楽雑誌『音楽之友』(瀧廉太郎特集号)に伝記をのせ、続いて拙著『明治音楽史考』(二十三年出版)中に「瀧廉太郎とその頃」を一章加えた。本書はその後知った史料を加え、訂正し、彼の生涯と作品を主に書き改めたものである。(遠藤宏『瀧廉太郎の生涯と作品』序(1950))

初版(昭和二十五年)が出たあとで、東くめさんから手紙をいただき、瀧廉太郎全作品二十九曲の他にもう一曲「四季の瀧」(東くめ作詞)が手もとにあるという報知をうけた。夭折した瀧の作品が一曲でも増加されることを希う私は、今回の再版にこの埋れた作品を追加する機会に恵まれたのである。(同「再版の序」)(1952)



瀧廉太郎

(1879.8.24-1903.6.29)

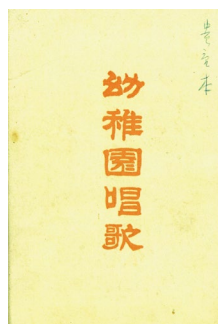
*瀧廉太郎記念館蔵



組歌「四季」

(共益商社楽器店 1900.11)

*日本近代音楽館蔵



幼稚園唱歌

(共益商社楽器店 1901.8)

*遠藤宏旧蔵書(日本近代音楽館「遠藤宏文庫」)



東くめ

(1877.6.30-1969.3.5)

*松本正『瀧廉太郎』(大分先哲叢書 大分県教育委員会 1997)より

東くめと瀧廉太郎

東くめは1877(明治10)年、新宮藩主の家老職を務めた由比家の長女として生まれた。大阪のミッションスクール、ウキルミナ女学校(現大阪女学院)を経て、東京音楽学校に学び、1897年研究科修了。在学中より作詞を手掛ける。卒業後東京府高等女学校(現東京都立白鷗高校)で教鞭を執り、1899年、同郷で女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)助教授(のち教授)東基吉と結婚。幼稚園教育研究に従事していた基吉は当時論議されていた言文一致唱歌運動に共鳴、口語詩によるこどものための歌を求めていた。くめは自作の詩による歌曲《四季の瀧》《納涼》を作曲していた2年後輩の瀧廉太郎とその友人鈴木毅一に図り、1901(明治34)年『幼稚園唱歌』を刊行。全20曲中くめの詩による12曲は廉太郎が付曲している。『幼稚園唱歌』はこどもの感性をよくとらえた清新な楽曲を揃えた上に、全曲伴奏つき。当時伴奏が付された唱歌集はほかに例をみない。画期的な唱歌集であった。



遠藤宏『瀧廉太郎の生涯と作品』

(再版 音楽之友社 1952)

主要参考文献 小長久子編『瀧廉太郎全曲集』音楽之友社 1969. 松本正著『瀧廉太郎』(大分県先哲叢書)大分県教育委員会 1995. 東基吉・くめ著『皐月歌集 歌集惜春』一燈園出版部(京都) 1957.

◎瀧廉太郎作曲《四季の瀧》 東くめ作歌 1899（明治32）年作曲 二部合唱 ピアノ伴奏
（ニ短調 4/4 拍子）

◎瀧廉太郎作曲《組歌「四季」》 共益商社楽器店 1900（明治33）年11月
楽曲構成

花	武島又次郎（羽衣）作歌	二部合唱	ピアノ伴奏	（イ長調 2/4 拍子）
納涼	東くめ作歌	独唱	ピアノ伴奏	（イ長調 6/8 拍子）
月	瀧廉太郎作歌	混声四部合唱	無伴奏	（ハ短調 6/8 拍子）
雪	中村秋香作歌	混声四部合唱	ピアノ、オルガン伴奏	（変ホ長調 4/4 拍子）

緒言

近来音楽は、著しき進歩、発達をなし、歌曲の作世に顕はれたるもの少しとせず。然れども、是等多くは通常音楽の普及伝播を旨とせる学校唱歌にして、之より程度の高きものは極めて少し、其稍高尚なるものに至りては、皆西洋の歌曲を採り、之が歌詞に代ふるに我歌詞を以てし、単に字句の数を割当るに止まるが故に、多くは原曲の妙味を害ふに至る。中には頗る其原曲の声調に合へるものなきにしもあらずと雖も、素より変則の仕方なれば、これを以て完美したりと称し難き事は何人も承知する所なり。余や敢て其欠を補ふの任に当るに足らずと雖も、常に此事を遺憾とするが故に、これ迄研究せし結果、即我歌詞に基きて作曲したるものゝ内二三を公にし、以て此道に資する所あらんとす。幸に先輩識者の是正を賜はるあらば、余の幸栄之に過ぎざるなり。

明治三十三年八月

瀧廉太郎

◎『幼稚園唱歌』 共益商社楽器店 1901（明治34）.8 オルガンまたはピアノ伴奏付

緒言／凡例

収録曲(20曲)

ほうほけきょ	瀧廉太郎作歌	瀧廉太郎作曲
ひばりはうたひ	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
猫の子	鈴木毅一作歌	鈴木毅一作曲
鯉幟（こひのぼり）	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
海のうへ	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
桃太郎	瀧廉太郎作歌	瀧廉太郎作曲
白よこいこい	鈴木毅一作歌	鈴木毅一作曲
お池の蛙	東くめ作歌	瀧廉太郎編曲
夕立	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
かちかち山	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
水あそび	瀧廉太郎作歌	瀧廉太郎作曲
鳩ぼっぼ	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
菊	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
雁（がん）	瀧廉太郎作歌	瀧廉太郎作曲
軍（いくさ）ごっこ	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
雀	佐々木信綱作歌	瀧廉太郎作曲
風車（かざぐるま）	鈴木毅一作歌	鈴木毅一作曲
雪やこんこん	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
お正月	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲
さよなら	東くめ作歌	瀧廉太郎作曲

凡例

一、本書載する所の歌曲の品題は、児童が日常見聞する風物童話等に取り、主として四季の順序に排列したれば教師は其期節の折々に応じて適当なるものを撰み、先づ、談話問答等に由りて、児童の興味を喚起せしめ、然る後一句づつ口授するを宜しとす。

一、歌曲の速度は決して緩慢に流るべからず、寧ろ急速なるべし（略）

一、唱歌の方法は活潑なるべし、然もよく児童の発音に注意し、決して粗暴なる叫声を發せしむべからず、又児童の歓心を買はんとて、徒らに多数の曲を教ふるはよろしからず、甲の歌曲充分熟練して後、はじめて乙の歌曲に移るべし。

一、本書の歌曲は、其趣味を助けんため伴奏を附したり、然れどもこは先づ口授法を以て、児童の大抵熟達したる後、楽器を添へて歌はしむる際に用ゐんが為めにして、初めより教授に伴はしめんが為にはあらず。

一、本書歌詞の仮名遣ひは、凡て文部省新定の方法に由りたり。